

言語理論における「認知」の位置づけに関する一考察 — 生成文法・関連性理論・認知言語学を中心に —

眞 田 敬 介

要 旨

本論文の目的は次の二つである。第一に、複数の言語理論において「認知」がどのように位置づけられているのかを概観する。本論では主要な言語理論のうち、生成文法、関連性理論、認知言語学の三つを取り上げ、それぞれにおける「認知」の位置づけ方の共通点と相違点を、先行研究の引用と分析例と共に示す。第二に、これら三つの言語理論同士が、言語と「認知」との関わりを軸に、これまでどの程度比較されてきたかをまとめる。複数ある言語理論同士が統合を図るべきなのか、棲み分けを図るべきなのかの方向性が、少なくともこれら三つの言語理論の間でははっきりしていないという現状を指摘する。この現状に鑑みて、具体的な言語現象の分析を積み重ねることによって、この問題の解決に努めるべきであることを最後に述べる。

キーワード：「認知」の位置づけ、生成文法、関連性理論、認知言語学

1. はじめに

言語学は、人間が言語を使う際に関わる心の働きや知識を究明する学問である。この「心の働き」「知識」は、「認知科学」(cognitive science)と呼ばれる複合科学分野が担当する分野であり(西川・阿部・仲 2008:3)、ここに言語学と「認知」の接点が見られる。

言語学が、言語と「認知」との接点を積極的に打ち出した時期は、遅くとも、Noam Chomsky の「生成文法」(generative grammar)が勃興した1950年代に遡る。この後、言語学が認知科学の一分野として位置づけられることになる(福井・辻子 2003:31)。その後、1980年代にDan Sperber と Deirdre Wilson が「関連性理論」(relevance theory)を提案するが、ここでも「認知」が重要視されている。これは、関連性理論を世に広める契機となった彼らの著書(Sperber and Wilson 1986/1995²)の副題に“cognition”という用語が含まれていることから明らかである。また、同じ1980年代に、「認知言語学」(cognitive linguistics)がRonald W. Langacker らにより提唱される。これは、言語を人間の認知能力の反映であると捉え、言語と「認知」の接点をより明確に打ち出した言語理論である。

このように「認知」との接点を探る言語理論が複数栄えてきたのだが、それぞれの言語理論

における「認知」の位置づけは、理論ごとに大きく異なる。例えば、生成文法は認知言語学と違い、言語を人間の認知能力の反映であるという見方は（少なくとも積極的には）採らない。また、関連性理論は、それまでの語用論理論以上に認知的に妥当な理論を目指す（松井 2003: 593）という姿勢から、「認知語用論」（cognitive pragmatics）という別名が与えられる。一方でこの用語は、認知言語学の枠組みを適用した語用論の名称としても用いられることがある（山梨 2004: 第3章）。ここで「認知語用論」という用語が多義的に用いられているのは明らかだが、両者が「認知」をどのように位置づけているのか、再考する価値があろう。

そこで本論は、まず、生成文法・関連性理論・認知言語学において「認知」がどのように位置づけられているのかの共通点と相違点をまとめる。続けて、上記の現状を背景に、複数の言語理論同士の比較を、具体的な言語現象分析を通してもっと活発に行い、「認知」の位置づけをどのように行うかの方向性を言語学全体ではっきりさせるよう努めるべきであると主張する。言語学全体が「認知」をどのように位置づけるべきかという問題は、言うまでもなく、本論の考察のみを通して統一的な見解を提案できるほど簡単な問題ではない。また、紙幅も筆者の力量も限られており、全ての言語理論を隈なく検討することは不可能である。それでも、どの言語理論を採るにせよ、「言語」と「認知」の関わりは言語研究において重要なテーマであることは疑いないはずである。そこで本論にて、複数の言語理論における「認知」の位置づけを改めて整理することは、言語と「認知」のありようを模索する一助になると考える。

本論の構成は次の通りである。まず第2節で「認知」という用語の定義を、国語辞典・英英辞典で確認する。次いで第3節で、生成文法・関連性理論・認知言語学の三つの主要な言語理論を取り上げ、それぞれにおける「認知」の位置づけをまとめる。第4節では、「認知」を軸とした複数の言語理論同士の比較に関する現状と展望を、文法研究と語用論的研究のいくつかの事例を通して述べる。第5節はまとめである。

2. 「認知」の定義

本節では「認知」という用語が一般的にどう定義されているかを確認する。「広辞苑」における「認知」の定義を(1)に、Oxford English Dictionary における“cognition”の定義（ラテン語の cognition-em “a getting to know, acquaintance, notion, knowledge, etc.”を語源に持つ）を(2)に、本論の議論と関係する箇所のみそれぞれ引用する。

- (1) にんち【認知】 事象について知ること、ないし知識を持つこと。広義には知覚を含めるが、狭義には感性に頼らずに推理・思考などに基づいて事象の高次の性質を知る過程。
- (2) cognition
 1. a. The action or faculty of knowing; knowledge, consciousness; acquaintance with a

subject.

2. *Philos. a.* The action or faculty of knowing taken in its widest sense, including sensation, perception, conception, etc., as distinguished from feeling and volition; also, more specifically, the action of cognizing an object in perception proper.

ここでは日英語の「認知」「cognition」のみの定義を引用したが、いずれにせよ「認知」とは「知」という行為・能力」という意味を持つ¹。これは、広く言えば「心の働き」「知識」のことであると考えるに良いだろう。この点と関係して、「認知」を扱う科学である「認知科学」の定義を(3)や(4)に引用しておく。

- (3) 「認知科学 (cognitive science) は、別名、心の科学 (science of the mind) ともいう。認知科学とは、したがって、心を究明する科学分野ということである」(西川・阿部・仲 2008:3)
- (4) 「人間がもつ「知識」についての科学、すなわち認知科学」(本多 2005:1)²

このように定義されてきた「認知」との接点を探る言語理論を三つ、次節にて取り上げる。

3. 言語理論における「認知」

第1節で述べたことの繰り返しになるが、言語学は、人間が言語を使う際にどのような心の働きや知識が関わるかを究明する学問である。従って、どのような言語理論を採用するにせよ、言語学は(3)(4)で引用した意味での認知科学の一部を成す。本節では、現代の主要な言語理論のうち生成文法・関連性理論・認知言語学の三つを取り上げ、「認知」がそれぞれの理論においてどのように位置づけられているのかを整理し、その位置づけ方の共通点と相違点をまとめる。

3.1. 生成文法における「認知」

Chomsky が生成文法を初めて公にしたのは、彼が1957年に書いた *Syntactic Structures* においてである。その後生成文法が隆盛し、後年「認知科学」と呼ばれることになる複合科学分野に言語学が位置づけられることになる (福井・辻子 2003:31, Taylor 2002:6-8などを参照)。生成文法の言語観の紹介は後に譲るとして、この言語理論はしばしば、認知科学を標榜していきながら、研究実践においては認知を十分に考慮していない、という批判を受けてきたようである (大津 2008:258)。大津 (ibid.) は、先に述べた批判が当たらないことは、Chomsky (1965: Chapter 1) を一瞥すれば明らかであると述べているが、この点については、恐らく次の箇所を指しているものと思われる (以下、本論の引用内の下線は、全て本論の筆者による)。

- (5) “in the technical sense, linguistic theory is mentalistic, since it is concerned with discovering a mental reality underlying actual behavior.” [Chomsky 1965:4]
- (6) “Any interesting generative grammar will be dealing, for the most part, with mental processes that are far beyond the level of actual or even potential consciousness; furthermore, it is quite apparent that a speaker’s reports and viewpoints about his behavior and his competence may be in error. Thus a generative grammar attempts to specify what the speaker actually knows, not what he may report about his knowledge.” [Chomsky 1965:8]
- (7) “To avoid what has been a continuing misunderstanding, it is perhaps worth while to reiterate that a generative grammar is not a model for a speaker or a hearer. It attempts to characterize in the most neutral possible terms the knowledge of the language that provides the basis for actual use of language by a speaker-hearer.” [Chomsky 1965:9]

「認知」を(3)で掲げた認知科学の定義に基づいて理解するならば、以上(5)―(7)の下線部は、確かに、Chomsky が認知科学としての言語学に目を向けていることを示すものと言えよう³。こうして、生成文法は、人間が言葉を知っていると言う時、どのような知識を持っているのか (Chomsky の言う「言語能力」(linguistic competence)), を追究する⁴。これは、「認知の視点から言語を見定めようとするのではなく、まずは言語の視点から認知を見定めようとする」(大津 2008:258) 生成文法の基本姿勢を反映しているといえる。

この姿勢を背景に、生成文法は、人間は普遍文法 (universal grammar) を生得的に心に持っているという仮説に基づき、統語論 (syntax) を中心とした理論を発展させていく。例えば、「話者が、文を構成する語が一定の順序で配列され、一定のまとまりを持ち、さらに階層構造を持つことを知っている」(中村・金子・菊地 2001:18) ことから構築された句構造規則 (phrase structure rules) や、代名詞・再帰代名詞の同一指示解釈に関わる束縛原理 (binding principles) などがある (他の原理については、中村・金子・菊地 2001を参照)。句構造規則については、英語のような SVO 言語において、主語と目的語がどのような構造的地位が与えられるかをごく概略的に示した下図を見られたい。S (文) に直接支配されている NP (名詞句) 1 が主語で、VP (動詞句) に直接支配されている NP 2 が目的語である。

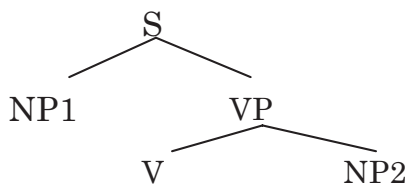


図. 主語と動詞句から成る句構造

このように、生成文法は、言語使用を可能にする心が、いったいどのような仕組みをもって
いるのかを追及するのである。生成文法が「認知」を標榜する動機づけは、このような「心の
仕組みの追及」によるものと考えられる。この点で、生成文法における「認知」は、第2節の
(1)(2)に引用したような、広い意味で「認知」が使われているようである。

その後生成文法は、変形文法 (Transformational Grammar), 統率束縛理論 (Government
and Binding Theory), ミニマリスト・プログラム (Minimalist Program) へと理論の変遷を遂
げていく。しかし理論の変遷の間も、生成文法が「認知」を言語と絡めてどのように位置づけ
ているかは一貫している。すなわち、生成文法は言語能力を、視覚などの他の認知能力とは本
質的に別のものであるという、つまり言語能力を一つの「モジュール」として見る立場（「心的
モジュール」(mental module) の仮定) を保持している。

ただし、言語能力を他の認知能力と別物とみなすことが、言語能力を他の認知能力が全く関
連しあうことがない、という意味にはならない。実際、福井 (2001:88-89) によると、ミニマ
リスト・プログラムは、言語能力の示す特性の少なくとも一部が、他の認知能力との関連によっ
て説明される可能性があることを明確に認めている⁵。ただし、ミニマリスト・プログラムに
おいても、主目的はあくまで言語能力の解明であるという立場に変わりはない (中島 2001:
122-123)。

3.2. 関連性理論における「認知」

関連性理論は、一言で言うと、人間の伝達行為の根底に、高い関連性を求めるという原理が
あることを主張した言語伝達 (verbal communication) の理論である。その理論を提唱した
Sperber and Wilson (1986/1995²) の副題には、“cognition” が含まれている。以上を背景に、
本節は、関連性理論における「認知」の位置づけを概観する。

関連性理論の入門書である今井 (2001) は、「認知」が何を指すかを、噛み砕いて(8)のよう
に述べている。

- (8) 「さまざまな想定を持っている状態、想定を増加・改善したいという欲求、想定を獲得・
改善する際の頭の働き」 [今井 2001:18]

関連性理論の志向に基づき(8)をさらに噛み砕いて述べるならば、「認知」とは「関連性を求め
るための心 (頭) の働き」となろう。その際の原則として、以下の(9)(10)が挙げられる。この二
つが「関連性の原理」(principles of relevance) を成す。(9)は認知に関する原理で、(10)は伝達
に関する原理である。

- (9) “Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.”

[Sperber and Wilson 1995²:260]

(10) “Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.”

[ibid.]

(9)は「人間は最大限の関連性を求めるものである」ことを述べ、(10)は「あらゆる顕示的伝達行為は、自らの伝達することが最適な関連性を持つことを示す」ことを述べる原理である。そして、これら二つの原理に則って伝達行為を行うために、(文字や音声などで)明示化された発話に様々な手段で肉付けを行い、相手の伝達したいことを理解するのである。(11)に引用する Sperber and Wilson (1995²: vii) の主張を考慮に入れておこう。

(11) “Human cognitive processes, we argue, are geared to achieving the greatest possible cognitive effect for the smallest possible processing effort. To achieve this, individuals must focus their attention on what seems to them to be the most relevant information available. To communicate is to claim an individual’s attention: hence to communicate is to imply that the information communicated is relevant.”

つまり、人間の認知処理は、最低限の処理労力で最大限可能な認知効果を得るという目的に合うように行われるものだ、ということである。

以上概観した関連性理論による分析の一事例として、(13)に見られる隠喩 (metaphor) の分析を取り上げる ((12)の「あの男」は字義通り人間を指すものとする)。

(12) 「あの男は狸だ」

字義通りの解釈に基づくならば、(12)に登場する男が人間でなく狸である、という解釈が得られてしまう。しかし実際はそのような解釈をすることは (通常は) ありえず、「あの男はずるがしこい」などの解釈をする。これは、(12)の聞き手は、話し手が何らかの伝達意図がある (つまり、何か聞き手にとって関連性のあることを伝えようとしている) ことを知っているからである。そこで、狸に伴う知識の一部である「ずるがしこい」を参照し、(12)の発話に肉付けを行い⁶、「あの男はずるがしこい」と解釈するに至るのである。

このように、話し手は「相手が自分にとって関連性の高いことを伝達しようとしているはずだ」と相手の心を読む能力がある、と関連性理論は考える。「相手の心を読む」能力というのは、(1)(2)に定義される意味での「認知」能力に含めて良いと思われるが、このような能力は「メタ表示能力」(metarepresentation theory) (東森・吉村 2003:3) と呼ばれる⁷。相手の言うことを発話場面に照らし合わせて適切な解釈ができるのは、このメタ表示能力があるからだ、と関

連性理論は主張するのである。このような主張は、（3.1節で見た生成文法と同様に）言語の視点から認知を見定めようとする」（大津 2008:258）姿勢につながっているといえよう。

また、関連性理論におけるメタ表示能力は、それ自身一つのモジュールを成すと仮定される（Sperber 1994:60-61；東森・吉村 2003:4）。これは、生成文法同様、関連性理論も心的モジュールを仮定しているからである（Sperber and Wilson 1995²:71-75）。

さて、第1節で言及したように、近年、この関連性理論の別名として「認知語用論」（cognitive pragmatics）という名称が使われている。わざわざ、「語用論」という用語に「認知」を冠する以上、認知的でない語用論があり、それとの区別のためにこの名称を採用したはずである。この点について、松井（2003:593）の以下の引用を見よう。

- (13) 「関連性理論は、Griceの意図推論的発話理解の主張をさらに認知的に妥当な語用論理論として発展させようとした試みである。関連性理論が持つ認知的スタンスは、概して規範的、あるいは社会学的な性格を帯びていた従来の語用論理論とは対照的であり、最近では特に「認知語用論」(cognitive pragmatics)としてのアプローチをより明確にしている(...)。上記の伝達意図の理解や、コミュニケーションに用いられる推論能力の発達という、いまだほとんど未知の領域に一石を投じる理論としても注目される」

下線部は、先ほど言及した「メタ表示能力」であるが、人間が言葉を使ううえでこのような認知能力が関わっているという主張こそが、関連性理論に「認知語用論」という別名が与えられ、さらには、関連性理論が認知との関連を打ち出す動機づけになっているのである。

3.3. 認知言語学における「認知」

第3節の冒頭で述べたように、言語学は多かれ少なかれ「認知」的だと言って良いのだが、それにもかかわらず、「認知」を冠した「認知言語学」（cognitive linguistics）という言語理論が、1980年代に Ronald W. Langacker や George Lakoff らにより提案された。この理論は今や主流の言語理論の一つとなったが、この言語理論がわざわざ「認知」を冠したからには、Langacker らの言う認知言語学と違って「認知」的でない言語学があり、両者が区別されなければならない。では、Langacker らの「認知言語学」とそれ以外の言語理論とで、「認知」の位置づけがどう違うのか。このことを本節で概観する。

Langacker（1987）が提案した理論は、厳密には「認知文法」（Cognitive Grammar）と呼ばれているが、彼がどのような動機付けで「認知文法」という用語を用いているのかについて述べた箇所を、以下の(14)に引用する。

- (14) “My objective in this work is to present and support a particular conception of grammatical

structure. It emerges organically from a comprehensive and unified view of linguistic organization characterized in terms of cognitive processing. For this reason I will refer to the framework as **cognitive grammar**.” [Langacker 1987:1. 太字は原著による]

すなわち、「認知文法」という用語は「文法を認知処理の観点から研究する」という方針を表しているということである。この方針から、言語を人間の認知能力の反映であると捉える立場が認知文法、及び Lakoff (1987) などの「認知意味論」(cognitive semantics) を含めた認知言語学全般において採られることになる。この立場は、認知言語学は従来の言語学（特に生成文法を指すことが多い）と違い、人間の認知の働きや意味に重点を置いて言語分析を行うべきであるとの立場につながる。

さて、ここで言う認知の働きについて、Langacker は(15)のようなものを列挙している。以下は、最も簡潔にまとめられている Langacker (1999:2-3) を元に列挙したものである（以下は順不同である。また、(15i)は本論の議論の便宜上、筆者が追加したものであり、Langacker 1999:2-3には掲載されていないが、認知言語学において「認知能力」の一つとして広く認められている)⁸。

- (15) a. The inborn capacity for certain kinds of experience (e.g. colors, pitches, tastes, smells, and tactile sensations)
- b. Comparing two experiences and registering either their identity or any discrepancy between them
- c. Using one structure as the basis for categorizing another
- d. The capacity for abstraction (schematization) and for conceiving of situations with varying degrees of specificity and detail
- e. Directing and focusing our attention, and to structure scenes in terms of figure/ground organization
- f. Conceiving of entities in connection with one another
- g. Mental scanning (in sequential or summary fashion)
- h. Structuring image schemas
- i. Reference point ability

(15a)はつまり「五感による経験」であるが、これは、以下の(15b)-(15h)とも密接にかかわる特に基本的な能力である。

(15b)は「比較するという能力」である。(15c)は(15b)とも関わるが、あるものが別のものと似ているので一つのカテゴリー（範疇）にまとめる、あるいは別のカテゴリーに分ける、と

いうことである。例えば、山へキノコ狩りに行ってあるキノコを見つけたときに、「椎茸と似ているから食べられるかもしれない」と判断するとか、「色が緑で、我々が食べられるキノコに緑のものはないから、食べられないだろう」と判断するといったことに、この能力は使われる。

(15d)の「抽象化」については、我々がある物体を様々な抽象度（あるいは具体度）で認識することを表している。これにより、状況に応じて「函館本線の大森駅」と詳細に（かつ具体名を）述べたり、「その駅」とだけ述べたり、「そこ」としか言わなかったりすることができる。

(15e)については、我々はある出来事なり物の全てに対し、同程度の注意を払っているということは考えにくい。街中の通りを眺めていて、建物だけに注意が向く場合もあるし、建物よりも動く車や人に注意を払うこともあるであろう。このとき、より注意が向けられるのが図 (figure) で、図ほど注意が向けられず、図を認識する際の背景として機能するものが地 (ground) である。

(15f)の「実体と実体の関係を見出す」という能力は、例えばある物体同士の位置関係を見出す、などといった際に用いられる。

(15g)は、例えばボールを投げたときにそのボールの軌跡を追ってスキャンするのが連続的スキャンニング (sequential scanning) で、動いているボールを（何枚もの写真を1枚に合成するなどして）一度に捉えるのが一括的スキャンニング (summary scanning) である。

(15h)は、様々な経験にある基本的・抽象的な鋳型でもって理解する能力を指す。例えば「数字が上がる」という表現において（実際はそこに物理的な上昇がないにも関わらず）「上がる」という表現が使えるのは、お金という物が積み重なると高さが上がる、といった理解が伴うからであり、これがイメージスキーマ（の一つ）である。

最後に(15i)は、ある実体Aを理解するために、別の（より認知しやすい）実体Bを参照するという能力である。例えば、「コップの底」と言うとき、コップを参照してからその底を理解する。このとき、コップが参照点の役割を果たす。

認知言語学に基づく言語分析の実例を二つ取り上げる。一つは主語や目的語などの文法関係の分析、もう一つは隠喩分析である。まず、文法関係の分析であるが、ここでは主語と目的語の選択に話を絞る。上の図で見たように、生成文法の句構造規則において、主語は動詞句の外にある項、目的語は動詞句の内にある項として定義される。この定義において主語や目的語の意味が言及されていないことに注意されたい。これに対し認知言語学は、主語や目的語も意味に基づく定義が可能だとし、次のような意味的定義を与える。すなわち、主語はある事態において最も際立つ実体、目的語は主語の次に際立つ実体、と定義する。それぞれ、認知心理学における図 (figure) と地 (ground) に対応すると考えて、ここでは差し支えない。例えば、John が Bill を殴るという事態を言語化する際、話し手が John を図として捉えるならば(16a)のような文を作るであろう。一方、Bill を図として捉えるならば(16b)のような文を作るであ

ろう（いずれも他の文を作る可能性を否定するものではない）。

- (16) a. John hit Bill.
b. Bill was hit by John.

(16a) (16b) のいずれにおいても図として捉えられる実体が主語として言語化されていることと、(16a) については John の次に際立つ（地として捉えられる）Bill が目的語として言語化されていることを確認されたい。文法関係に対するこのような分析は、人間が(15e)のような認知能力を持っているからに他ならず、ここに言語を人間の認知能力の反映とみなす姿勢が見られる。

次に隠喩の分析であるが、3. 2節で取り上げた(12)「あの男は狸だ」という隠喩の例を思い出されたい。認知言語学の観点から隠喩を分析すると次のようになる。すなわち、話し手は「あの男」と「狸」には「性格がずるがしこい」という類似性を見出し、その類似性を動機づけとして「あの男は狸だ」という表現を用いるのである。ここに(15b)の認知能力が働いているのは明らかであり、やはり、言語を人間の認知能力の反映とみる態度が見出せる。

(15)に列挙した認知能力において重要なのは、認知言語学が、これらの能力は言語使用に関わらず人間が持つ能力であることを踏まえた上で、言語使用に欠かせないものとして積極的に位置づけているということである。つまり、認知言語学の言語研究は、生成文法と異なり、言語能力以外の一般的認知能力に積極的に関連付けているのである。この姿勢は、大津（2008）の言葉をもじると、「認知から言語を見る」という立場を採っていると言えよう⁹。そして、この姿勢こそが、認知言語学において「認知」が標榜される動機づけになっているのである。

最後に、ここまでまとめたような志向性をもって言語伝達の研究に当たるのが、（3. 2節で導入した意味とは別の意味での）「認知語用論」である。分析例を一つだけ紹介すると、従来の語用論において「間接発話行為」（indirect speech act）と呼ばれてきた(17)の文を見よう。

- (17) It did not take Gaffer long to explain what he wanted the Italian to do. “Well,” he concluded, “what about it? *Can you do it?*”

[Thornburg and Panther 1997:210. イタリアックは原著による]

イタリアックで書かれた“Can you do A?”の疑問文は、字義通りの解釈では、聞き手がAを行う能力の有無を問う。しかしここでは、聞き手への依頼ととるのが自然であろう。このような解釈ができるのは、(15i)の参照点能力（を用いたメトニミー）によるものだ、と Thornburg and Panther（1997）は主張する。具体的には、聞き手HにAするよう依頼するという行為は一つのシナリオを成し、その中に「HはAをする能力がある」という要素が含まれる。(17)

の依頼はまさにこの要素を参照して行われているのだ、ということである。

3.4. 要約

ここまで、言語と「認知」の関わりを追究する言語理論のうち、生成文法、関連性理論、認知言語学の三つを取り上げ、それぞれが「認知」をどのように位置づけているのかを概観してきた。「認知」という用語の意味を広く捉えるならば、三つとも共通の意味、すなわち、「心の働き」「知識」の意味でその用語を用いていると言って良いだろう。一方で、3節の議論の限り、少なくとも次の二つの観点で「認知」の位置づけ方が区分されている。

第一に、実際の言語研究においてどの程度具体的に「認知」を考慮するかで、生成文法とそれ以外とで分けられる。生成文法における「認知」は、第2節の(1)(2)に挙げた最大限広い意味で「認知」を用いるに留まっているようである。一方、関連性理論と認知言語学は、生成文法よりも踏み込んだ意味で「認知」を用いているが、具体的にどの「認知」の働きに主に注目するかという点で、この両者は区別される。具体的には、関連性理論は「メタ表示能力」に、認知言語学は(15)に挙げたような認知能力に、それぞれ言及している¹⁰。

第二に、言語と「認知」の間の関係づけの方法によって、認知言語学とそれ以外とで区分できる。認知言語学は認知から言語を見るという立場を採り、言語能力がそれ以外の一般的認知能力によってどの程度動機づけがなされているかに注意を払う。一方、生成文法と関連性理論は、言語から認知を見るという立場をとり、言語能力は他の一般的認知能力とは（関わりがあることは否定しないが）別物であるという立場を採る。つまり、心的モジュールを仮定する。

4. 言語理論間の比較：現状と展望

さて、第3節で見たように、「認知」を標榜する言語理論が複数存在すると、次のような疑問が生ずる。これら複数の言語理論は、言語現象の分析を通して、(i)理論的統合を図る方向に進むべきなのか、あるいは(ii)何らかの動機づけで棲み分けを行う方向に進むべきなのか（(ii)の場合は、棲み分けを行う動機づけが必要である）、という疑問である。本節では、このような問題に対する現状と展望を述べる（具体的な事例研究は稿を改めたい）。以下は、「(狭義の)文法研究」における生成文法と認知言語学の比較と、「語用論的研究」における関連性理論と認知言語学の比較に、話題を限定する¹¹。なお、これらの理論の比較を行った研究は数多く、本節で紹介したものはそのほんの一部に過ぎないことを付記しておきたい。

4.1. 生成文法と認知言語学の比較：(狭義の)文法研究において

生成文法と認知言語学の間で論争が展開されて久しいが、これの理由の一つは、両者は言語と「認知」の関連付けの仕方が異なるためであろう。まず、認知言語学の「認知から言語を見

る」という姿勢、そしてそのために認知や意味と密接に関連づけて言語を分析する姿勢は、生成文法の立場から批判されてきた。例えば、今井（2002:64-65）は、「認知一般は解明しつくされたわけではない」ことから、「解明されていないものを基盤にする説明には限界があ（る）」と述べている¹²。一方、生成文法の「言語から認知を見る」、そのために言語を認知や意味から一度切り離すという方針も、他の認知能力と言語能力との協同作業なしに解明できない現象が認知言語学から指摘されることで、批判にさらされている（4. 1節を参照）。また、似たような趣旨での生成文法の批判は、（狭義の認知言語学者ではない）土屋（2008）においても見られる。

- (18) 「言語現象の考察においては、いかなる表現もその意味論的働きを実際の使用の場面、使用者の能力、知識、状態と切り離してはならない」 [土屋 2008:217]

さて、生成文法と認知言語学のせめぎあいは、特に狭義の（すなわち、主に文レベルでの）文法研究において展開されてきた¹³。認知言語学が栄え始めた1980年代以降、その枠組みによる文法研究は、「自分たちの扱う現象を適切に分析するには、生成文法ではなく認知言語学が有効である」と主張することが一般的であったように思われる¹⁴。例えばDeane（1991）は、「島の制約」（island constraint）というそれまで生成文法で活発に議論されていた現象が、「注意」（attention）（(15e)を参照）によって、より妥当に説明できることを主張した。また、van Hoek（2003）は、それまで束縛理論で説明されてきた「代名詞照応」（pronominal anaphora）が、参照点能力（(15i)を参照）に動機づけられており、その能力に依るほうが説明力の勝ることを主張した。

しかし、このような議論の流れが、少なくとも狭義の文法研究において、(i)生成文法を認知言語学に吸収すべきということを示すものなのか、それとも(ii)生成文法で扱えないが認知言語学では扱える領域があり、逆の領域もあることを認めるものなのかは、はっきりしていないように筆者には思われる¹⁵。生成文法と認知言語学を比較検討する際は、一方を他方に吸収するのか、あるいは両者の棲み分けを行うのかというもっと広い視野での検討が、具体的な言語現象の分析と共に、今後一層進められるべきであろう。

また、認知言語学は、3. 3節で述べたように、言語を人間の認知能力の反映であるという立場を採り、生成文法のアンチテーゼとして出発した理論であった。そうである以上、生成文法で採られてきた（句構造規則や束縛原理などの）道具立てが、どの程度人間の認知能力に動機づけられるか（つまり、どの程度、生成文法の理論的装置を認知的動機付けの下に破棄できるか）の検証を、具体的な言語現象の分析を通して、続けていく必要がある。

本節の最後に、生成文法と認知言語学（と大きく重なる認知・機能文法）とは共存させるべきと明確に主張した高見（2008:74）からの引用を(19)に挙げる。

- (19) 「言語現象は (...) 文の構造のみでは説明できないものや、また逆に、文の意味・機能、人間の認知・知覚のみでは説明できないものがある。したがって、それぞれの文法理論はそれぞれの得意とする持ち場があり、言語現象の解明に対して生成文法はその現象の統語的側面を明らかにし、認知・機能文法はその現象の非統語的側面を明らかにして、言語現象のより深い分析を共同して求めるべきである。両者は決して対立するものではない」

この主張の妥当性を、今後具体的な現象分析を積み重ねつつ検証し続ける必要があるだろう。

4.2. 関連性理論と認知言語学の比較：語用論的研究において

関連性理論と認知言語学は、生成文法以上に明確に、「認知」的観点から研究を進めることを打ち出してきた。一方で両者は、「心的モジュールを仮定するか否か」、「言語から認知を見るか、認知から言語を見るか」、そして「どの認知能力に注意を払うか（メタ表示能力か、(15)に列挙された認知能力か）」で対立する。両者は、主に「語用論」の分野で扱われてきた現象の分析においてせめぎあいを見せてきた（「認知語用論」に言及した3.2節と3.3節も参照）。

例えば、Wilson（2008）は隠喩を取り上げ、認知言語学が隠喩のための理論を作り上げている点で経済的ではないのに対し、関連性理論は「高い関連性を求める」という関連性の原理で隠喩を（他の語用論の現象を含める形で）十分統一的に説明できると主張している。つまり、隠喩の説明に関して言えば、関連性理論が認知言語学を吸収する可能性を示唆していることになる。一方、眞田（2006）は、根源的用法の *must* と *have to* の意味論的語用論的な区分の可能性を、関連性理論と認知言語学の両理論から検討した。そこでは、*must* と *have to* は関連性理論の枠組みでは適切に区別できず、認知言語学の枠組みに依拠することでその問題が解決されることが主張された。つまり、*must* と *have to* の分析に関して言えば、認知言語学が関連性理論を吸収する可能性を論じたことになる。他に、尾谷・古牧・井門（2004）は、直喩（*simile*）を表す表現を題材に、認知言語学と関連性理論とで議論を戦わせた。こちらは、いずれがいずれを吸収するのか、共存させるのかについて決着していないように思われる。

このような論争が盛んに進められている一方で、やはり認知言語学と関連性理論の間においても、(i)一方がもう一方を吸収すべきなのか、(ii)現象ごとに棲み分けを図るべきなのかという問題は、現時点では方向性がはっきりしていないように思われる。例えば、認知言語学の立場から、中村（2002:87）は「含意を算出する際の推論 (...) の能力（三段論法など）が、より一般的な認知能力に由来するとなると、認知語用論（すなわち RT）は、CL に吸収され、その存在意義を失うことになる」と述べている（RT, CL はそれぞれ関連性理論、認知言語学を指す）¹⁶。一方で、Wilson（2008）が隠喩研究を通して主張したように、一般的認知能力に動機づける説明は、高い関連性を求める能力（メタ表示能力に由来する）に結び付けて行う説明に吸収できる、という主張もある。いずれの立場を支持するべきか、あるいは理由付きで両

方とも支持すべきなのか、今後具体的な語用論的現象の分析を通して検証する必要があるだろう。

5. おわりに

以上、本論は生成文法・関連性理論・認知言語学の三つの言語理論を取り上げ、それぞれが「認知」をどのように位置づけているかを整理した。その結果、それぞれが違う意味で「認知」を位置づけていることを見てきた。具体的には、「どの程度具体的に『認知』を考慮するか。及びどの認知能力を考慮に入れるか」と「言語と『認知』をどのように関係づけるか」の少なくとも二点において、「認知」の位置づけ方がそれぞれ異なることを見てきた。続けて、複数の言語理論同士の比較の現状を、いくつかの分析事例と共にまとめた。その結果、理論的統合を図るのか共存を図るのかの方向性をはっきりさせるよう努めるべきことを述べた。今後は、本論で取り上げた以外の理論も含めて、上記の問題の検討を進めていくべきであろう。その検討を通して、言語と認知の関わりのあるところが少しでも明らかになるものと考えている。

最後に、本論で提起した問題の議論に伴うと考えられる問題を二つ指摘しておきたい。

第一に、理論の統合へ向けての主張に伴う問題点を述べる。理論的統合は、言語学に限らず科学研究全般で採られる「説明の一般化・経済性」という点から見ると、言語学が採るべき方向性であることは間違いないように思われる。しかし、野村（2001:66-67）が指摘するように、「抽象化、一般化した説明によってそれぞれの現象の特性が見失われてしまう恐れもなしとは言えない」ことを忘れてはならないだろう。

第二に、理論の共存へ向けての主張に伴う問題点を指摘する。本論で取り上げた三つの言語理論は、言語と「認知」の関連付け方によって、認知言語学とそれ以外とに分けられる、と3.4節で述べた。生成文法と認知言語学、及び関連性理論と認知言語学を共存させるべきと主張するならば、「言語と『認知』の関係づけに関して正反対の見方を採る言語理論同士が、どこまで本当に共存可能と言えるのだろうか」という問題を避けることはできないように思われる。

注

- 1 以下は「認知」という日本語の用語を一貫して用いる。他に「生成文法」「関連性理論」「認知言語学」などの専門用語に言及するときは、日本語のものも英語のものも同じものを指すとし、原著からの引用など特別な理由がない限り日本語の用語を用いることにする。
- 2 (4)の引用元である本多（2005）は、（3.3節で概観する）認知言語学の枠組みによる研究だが、(4)の引用をするにあたり、認知言語学内で特化した意味での「認知」ではなく、あくまで一般的な定義として「認知」に言及した箇所を探すよう留意した。
- 3 なお、(6)の引用に続けて、視覚という他の認知能力の分析方法に言及している以下の引用にも注意すべきであろう。

“Similarly, a theory of visual perception would attempt to account for what a person actually sees and the mechanisms that determine this rather than his statements about what he sees and why, though these statements may provide useful, in fact, compelling evidence for such a theory.” [Chomsky 1965:8-9]

- 4 この「言語能力」と対比する概念として、Chomsky は「言語運用」(linguistic performance) という用語を導入している。Chomsky (1965:3-4) などを参照。
- 5 この考え方に基づく言語分析の紹介は、奥 (2008) を参照。
- 6 関連性の高い解釈を得るための具体的な肉付けの方法は、東森・吉村 (2003:34-42) を参照。
- 7 この能力は「含意を算出する際の推論」(中村 2002:87) をするための能力とも言えよう。
- 8 認知能力の列挙については、他に Langacker (1990:291), 山梨 (2004:3-5) などとも参照。また、土屋 (2008:75) も、彼の言う認知の理論の中心的部分に位置する基本的概念を挙げている。
- 9 これは、3. 1 節で概観した生成文法と正反対の立場である。
- 10 本論はもちろん、関連性理論と認知言語学が、それぞれ 3. 2 節・3. 3 節で触れた認知能力しか用いていない、と主張しているわけではない。
- 11 生成文法と関連性理論とをせめぎ合わせた研究は、筆者はその存在を知らない。これは、両者が心のモジュール観を共有していることと関係があると思われる。3. 1 節と 3. 2 節で概観したように、生成文法は「(Chomsky の言う) 言語能力」を、関連性理論は「メタ表示能力」を、それぞれモジュールと見なしている。従って、両者を (多かれ少なかれ) 切り離して考えているはずなので、両者をせめぎ合わせる動機がないということなのかもしれない。
- 12 今井 (2002) 自体は関連性理論に関する論文だが、彼自身は生成文法の支持者でもある。
- 13 他に言語習得の分野においても、生成文法と認知言語学の間で論争が繰り広げられているが、紙幅の関係で本論では取り上げない。生成文法の立場による Chomsky (2005), 認知言語学の立場による Tomasello (2003) などを参照。
- 14 認知言語学が生成文法を批判して議論を進める研究が多いのは、そもそも認知言語学が、生成文法のアンチテーゼとして提案された一面があるからであろう。なお、筆者の印象の限りでは、逆の方向の研究、つまり (ある具体的な文法現象を取り上げて) 認知言語学を批判し生成文法を支持するという研究は、どういうわけか多くはない。
- 15 本論では扱わなかったが、機能的統語論 (Functional Syntax) は、生成文法の分析を受容しつつもそこでは扱えない部分もあり、その部分を機能的に分析するという立場を採る。つまり、生成文法と機能主義言語学という複数の言語理論の棲み分けが図られているのである。久野・高見 (2007), 高見 (2008) などを参照。
- 16 中村 (2002) の引用で触れられている「推論」を認知能力の範疇に含める立場もある。大堀 (2002:25-26) を参照。

参考文献

- Chomsky, Noam. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.
- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge: The M.I.T. Press.
- Chomsky, Noam. 2005. "Three Factors in Language Design". *Linguistic Inquiry* 36 (1). 1-22.
- Deane, Paul D. 1991. "Limits to attention: A cognitive theory of island phenomena". *Cognitive Linguistics* 2: 1-63.
- 福井直樹. 2001. 『自然科学としての言語学—生成文法とは何か』. 東京: 大修館書店.
- 福井直樹, 辻子美保子. 2003. 「訳者による解説」. ノーム・チョムスキー, 『生成文法の企て』, (福井直樹・辻子美保子 (訳)). 東京: 岩波書店. 1-34.
- 東森勲, 吉村あき子. 2003. 『関連性理論の新展開: 認知とコミュニケーション』. 東京: 研究社.
- 本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論: 生態心理学から見た文法現象』. 東京: 東京大学出版会.
- 今井邦彦. 2001. 『語用論への招待』. 東京: 大修館書店.
- 今井邦彦. 2002. 「真の語用論—関連性理論の切れ味」. 『語用論研究』4. 55-68.
- 久野暁, 高見健一. 2007. 『英語の構文とその意味—生成文法と機能的構文論—』. 東京: 開拓社.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar Volume I. Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image and Symbol*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- 松井智子. 2003. 「関連性理論－認知語用論の射程」, 『人工知能学会誌』18 (5), 592-602.
- 中島平三. 2001. 「生成文法」, 辻幸夫 (編), 『ことばの認知科学事典』, 東京: 大修館書店, 98-131.
- 中村捷, 金子義明, 菊地朗. 2001. 『生成文法の新展開－ミニマリスト・プログラム』, 東京: 研究社.
- 中村芳久. 2002. 「認知言語学からみた関連性理論の問題点」, 『語用論研究』4, 85-102.
- 西川泰夫, 阿部純一, 仲真紀子. 2008. 『認知科学の展開』, 東京: 放送大学教育振興会.
- 野村益寛. 2001. 「認知言語学の展開－理論的統合の動きを中心に」, 『北海道大学文学研究科紀要』105, 51-70.
- 尾谷昌則, 古牧久典, 井門亮. 2004. 「認知言語学と関連性理論の接点と課題: 〈類似性〉に基づく表現 “like” と “よう” をを中心に」, 『日本認知言語学会論文集』第4巻, 458-470.
- 大堀壽夫. 2002. 『認知言語学』, 東京: 東京大学出版会.
- 奥聡. 2008. 「言語能力と一般認知能力との相互関係: 生成文法の試み」, 『北海道英語英文学』53, 41-77.
- 大津由紀雄. 2008. 「一生成文法研究者から見た『言語獲得の用例基盤モデル』」, 『日本認知言語学会第9回大会 Conference Handbook 2008』, 255-258.
- 眞田敬介. 2006. 「関連性理論と認知言語学: 根源的用法の must と have to の意味をめぐる」, 『日本認知言語学会論文集』第6巻, 371-380.
- Sperber, Dan. 1994. “The modularity of thought and the epidemiology of representations”. Hirschfeld, Lawrence A. and Susan A. Gelman (eds.), *Mapping the Mind: Domain Specificity in Cognition and Culture*. Cambridge: Cambridge University Press, 39-67.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1986/1995². *Relevance: Communication and Cognition*. Cambridge: Blackwell.
- 高見健一. 2008. 「生成文法は認知・機能文法とどのように折り合うのか」, 『月刊言語』Vol.37, No.11, 東京: 大修館書店, 72-77.
- Taylor, John R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Thornburg, Linda and Klaus Panther. 1997. “Speech Act Metonymies.” In Liebert, Wolf-Andreas, Gisela Redeker, and Linda Waugh (eds.), *Discourse and Perspective in Cognitive Linguistics*, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 205-219.
- Tomasello, Michael. 2003. *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Cambridge: Harvard University Press.
- 土屋俊. 2008. 『真の包括的な言語の科学』, 東京: くろしお出版.
- van Hoek, Karen. 2003. “Pronouns and Point of View: Cognitive Principles of Coreference”. Tomasello, Michael (ed.), *The New Psychology of Language* Volume 2. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates, 169-194.
- Wilson, Deirdre. 2008. “Parallels and differences in the treatment of metaphor in relevance theory and cognitive linguistics”. 日本語用論学会第11回大会 (2008年12月20日・21日, 於松山大学) における特別講演.
- 山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』, 東京: 開拓社.

Notes on the Status of “Cognition” in Linguistic Theories: With Main Focus on
Generative Grammar, Relevance Theory, and Cognitive Linguistics

SANADA Keisuke

ABSTRACT

The present paper has two purposes. Firstly, the status of “cognition” is surveyed in the following three linguistic theories: generative grammar, relevance theory, and cognitive linguistics. It is shown that “cognition” has been given a different status in each theory, with quotations from previous studies (such as Chomsky 1965, Sperber and Wilson 1986 and Langacker 1987) and some cases of analyses in each theory. Secondly, the present conditions are surveyed of how these three linguistic theories have been compared so far, with reference to the relation between language and “cognition”. I point out that at least the three linguistic theories as a whole has not yet reached a consensus as to the following problem; whether linguistic theories (i.e. the ones which pays attention to the relation between language and “cognition”) should be unified, or should coexist based on explicit ecological niche(s). This problem, I argue, should be solved through more and more concrete analyses of linguistic phenomena.

Keywords: the status of “cognition”, generative grammar, relevance theory, cognitive linguistics.

（さなだ けいすけ 本学人文学部専任講師 英語学専攻）